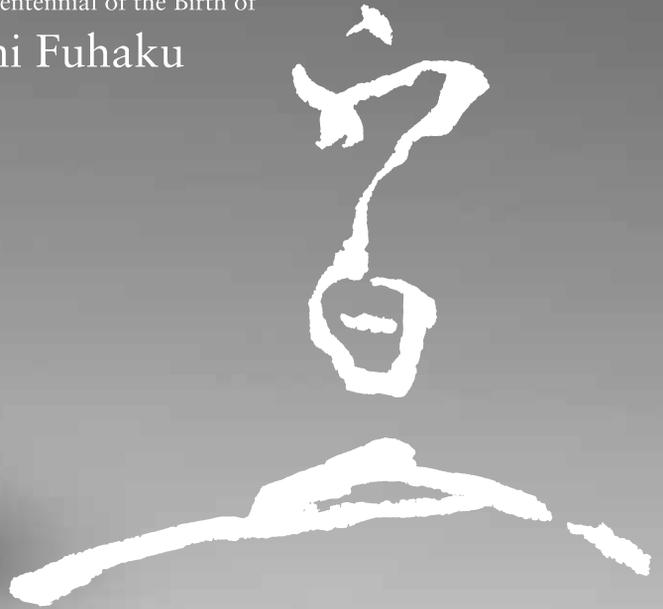


Special Exhibition

The Tea Ceremony in Edo

Commemorating the Tricentennial of the Birth of
Kawakami Fuhaku



かわかみ ぶはく
川上 不白
生誕三百年

特別展

江戸の 茶の湯

2019年
11月16日(土)～12月23日(月)

根津美術館

NEZU MUSEUM

享保19年(1734)、紀州藩の江戸詰家老・水野家の家臣の次男で、仕官して江戸にあった16歳の少年が京に上り、紀州徳川家の茶道師範を務めていた表千家七代如心斎天然宗左(1705～51)に入門します。政治都市・江戸が文化面でも力を増しつつあったなか、茶の湯においても、茶聖・千利休(1522～91)直系の人材が求められたのかもしれませんが。この少年こそ、後に千家の茶を江戸に広めて不白流の茶家の祖となる川上不白(宗雪、1719～1807)です。

上京した不白は茶の道に精励し、早々に如心斎の信任を得ます。側近として、新しい時代の茶の湯の稽古法「七事式」の制定に関わる一方、師とともに大徳寺に参禅して「孤峰」の道号を賜り、ついには、千家における正統な継承者であることを証する「茶湯正脈」を授けられます。千家流の茶人として大成して江戸に戻った不白のもとには、大名や旗本、豪商、市井の人々までもが続々とその門をたたき、江戸の茶の湯を隆盛に導くこととなります。さらに不白の茶は、近代の数寄者たちにも好まれました。当館のコレクションの礎を築いた根津青山(初代嘉一郎、1860～1940)の茶の湯の師も、不白流の茶人・岡田秋湖(1855～1924)です。

本展覧会は、不白生誕三百年を記念して開催するものです。如心斎との師弟関係や、不白好みの道具はもとより、大名をはじめとする門人や周辺の職人たちとの関わり、その人柄を映したような魅力的な書画、そして近代数寄者への影響まで多角的に展覧し、江戸後期から近代にかけて大きな支持を得た不白の茶の湯の魅力を探ります。

根津美術館
NEZUMUSEUM



<http://www.nezu-muse.or.jp>

一、プロローグ ―如心斎と不白―

表千家七代如心斎は、稽古法や門弟組織を整えて現在の家元制度の基礎を作り、千家「中興の祖」と呼ばれます。不白は如心斎に学ぶとともにその活動をサポートし、やがて千家流の茶を江戸に広めるのです。



あかくろいっそうちやわん
赤黒一双茶碗 川上不白作
2口 施釉陶器
日本・江戸時代
文化2年(1805)
個人蔵

不白の八十八歳の折に、鶴亀一双で作られた茶碗。首を高くのぼした姿の鶴は赤い釉に、木の葉のような姿の亀は黒釉に、それぞれ白土で描かれている。一双ではあるが、茶碗の形が同じではないのが面白い。

二、如心斎から不白へ

不白は16歳から32歳まで如心斎に仕えて茶事を支え、千家茶道の体制作りに寄与しました。江戸に戻ってからも如心斎が切望した「利休遺偈」を千家に戻すため奔走し、師に尽くします。

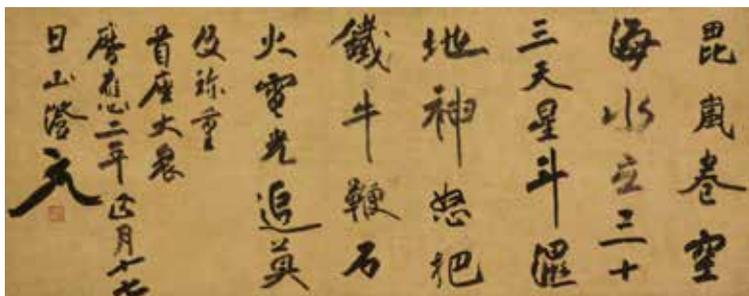


くろらくちやわん かみやぐる
黒樂茶碗 紙屋黒
ちょうじろう
長次郎作
1口 施釉陶器
日本・桃山時代 16世紀
静嘉堂文庫美術館蔵

大きめでゆったりとした姿は、同じ長次郎の半筒形の茶碗とは異なる姿である。不白が江戸に下ることを決めたときに、後援者であった大坂の豪商 鴻池家から饒別として贈られたのがこの茶碗であった。

三、不白の茶の湯 ―江戸での活躍―

江戸での不白は駿河台に黙雷庵、後には神田に蓮華庵を建て、千家茶道の普及に尽力しました。「不白筆記」からは、如心斎の教えや自身の茶の湯に対する姿勢をうかがうことができます。



国宝
せいせつしょうちやうぼくせき ゆいげ
清拙正澄墨蹟 遺偈
1幅 紙本墨書
日本・南北朝時代
暦応2年(1339)
常盤山文庫蔵



俳人でもあった不白は、俳句を茶器の銘として用いた。本作の銘「うしとのミ牛尋るや五月闇」は、不白没後に刊行された「不白翁句集拾遺」の「十牛の図」の項にも掲載された一句。

じんぎゆう
茶杓 共筒 銘 尋牛 川上不白作
1本 竹
日本・江戸時代 享和元年(1801)
個人蔵

来日した中国僧、清拙正澄の絶筆。不白は安永4年(1775)8月から年末まで関西に滞在し、その間堺の茶会でこの墨蹟を目にした。名品で歓待を受けた、不白の名声の高さがうかがえる。

四、不白流の広がり

「茶人家譜」によると、不白の門人には大名・旗本などが114名、寺院12カ所、諸藩家臣104名、町人他が69名と幅広い階層の人々が見られます。ここでは、代表的な大名茶人との交流を見ます。

土佐藩山内家の9代藩主豊雍とよちかは、不白に茶道指南を命じて江戸藩邸に迎えた。この一行書は、明治25（1892）年に山内家の高知散田邸こうちさんだていに所在した品々を記した『御道具根居』お道具ねずえに記載が確認でき、山内家に伝わったことがわかる。不白と山内家を繋ぐ重要な一点である。



いちぎょうしょ
一行書 無心雲白閑
川上 不白筆
一幅 紙本墨書
日本・江戸時代 18世紀
高知県立高知城歴史博物館蔵

<多様な門人たち>

不白の門人は、不白流の茶匠である川上宗仕かわかみそうじゅうや石塚宗通いしづかそうつうばかりでなく、上野輪王寺の公遵法親王こうじゆんほっしんのうなどの皇族、盛岡藩の南部利雄なんぶとしかつや長州藩の毛利重就もうりしげたかなど大藩の大名、江戸蔵前の札差・青地宗三郎あおちそうざぶろうなどの商人、さらには相撲取りや魚河岸の若者までに及んだとされる。幅広い門人層からは、千家の茶の湯を江戸で広めようとした不白の強い意思がうかがえる。

五、不白の茶道具

不白の茶道具の醍醐味は、その造形の奔放さと力強さに内在する深い教養と繊細さにあります。ここでは、その個性が表出した自作の茶碗や茶杓をはじめ、好みの茶道具を紹介します。



あからくちやわん ただ
赤楽茶碗 銘 只
川上 不白作
1口 施釉陶器
日本・江戸時代 18世紀
個人蔵

掌にたっぷりと収まる大きな茶碗には、「只」の文字を表に、裏側には「思知茶道奥儀 可参常此一字」と記されている。箱書には五碗作った内の一つとある。「只」の文字を不白は好んで揮毫した。



けいとうまきえなつめ
鶏頭時絵棗
しおみこへえ
塩見小兵衛作
1合 木胎漆塗
日本・江戸時代 18世紀
個人蔵

不白は京都での修行中、表千家門前の本法寺が所蔵する中国元代の画家・銭舜举せんしゆんきよが描いた「鶏頭図」を見て強い関心を持ち、自ら模写するだけでなく、棗の意匠に好んで用いた。

六、不白の書画

晩年を中心に不白が自らしたためた書や画には、禅の味わいや俳諧的なユーモアがあふれています。また、請われて賛を寄せた作品には、不白の人間関係や趣味がうかがえます。

へちます
糸瓜図
なかむらほうちゅう
中村芳中筆、川上不白賛
1 幅 紙本墨画淡彩・墨書
日本・江戸時代
寛政 12 年（1800）
個人蔵

画面いっぱいに、墨のにじみを活かして糸瓜を描く。縦長のモチーフに沿うように不白が俳句の賛「千代の秋長きへちまの影ほうし」を書く。中村芳中（?～1819）は大坂の画家で、江戸に下って尾形光琳の画風を伝えた。



七、近代数寄者と不白流

当館のコレクションの礎を築いた根津青山（初代 嘉一郎）をはじめ、益田非黙（克徳）や塩原禾日庵（又策）など東京の近代数寄者の多くは不白流の茶人に師事しました。不白が江戸で広めた茶の湯が脈々と継承されていたのです。

へらめ
篋目が施された桃山様式の備前水指。底に、如心斎の手によって、不白の庵号である「黙雷」が朱書きで加えられている。不白所蔵の後、大正 11 年（1922）に根津青山へ渡った。



やはずくちみずさし もくらい
矢筈口水指 銘 黙雷
備前
1 口 無釉陶器
日本・桃山～江戸時代
17 世紀
根津美術館蔵

展示室 5

平家物語画帖―知っておきたい名場面―

『平家物語』の主要な場面を扇面に描いた「平家物語画帖」（3 帖）の全 120 場面のうち 48 場面を選んで展示します。細密描写が見どころです。



平家物語画帖
3 帖 紙本着色
日本・江戸時代 17 世紀
根津美術館蔵



（拡大）

八島の戦いの最中、竿の先に立てた扇を射落としてみよという平家軍の挑発に、義経軍の那須与一がみごとに応えた名場面。

展示室 6

口切の茶事

11 月、茶の湯では茶壺の口の封を切る「口切」がおこなわれます。この祝儀の行事にふさわしい晴れやかな茶道具約 20 件を取り合わせます。



ちゃつぽ しこくざる
茶壺 銘 四国猿
福建省系 1 口 施釉陶器
中国・元時代 14 世紀
根津美術館蔵

茶葉を保管するための茶壺は、16 世紀に飾って鑑賞することが流行した。本茶壺は、歪みのない姿と、胴部の円形の色変わりが見どころ。

関連プログラム

- 講演会** 「不自の茶の湯」
(事前申込制) 日時 12月8日(日) 午後2時～3時30分
講師 熊倉 功夫氏 (MIHO MUSEUM 館長)
会場 根津美術館講堂 定員130名
- 〈申込方法〉 当館ホームページの「イベント情報」の申込みフォームから、または往復はがき(1参加者1イベントにつき1枚)に参加を希望されるイベント名・住所・氏名(返信面にも)・電話番号を明記の上、
〒107-0062 東京都港区南青山 6-5-1
「根津美術館講演会係宛」にお送りください。
- ※11月8日(金)、午前10時より受付開始
(往復はがきは当日の消印より有効)。
※先着順で定員になり次第締め切らせていただきます。
- スライド
レクチャー**
(事前申し込み不要) 日時 11月22日(金)、12月13日(金)
いずれも午後2時から45分程度
講師 西田 宏子(当館 顧問)
会場 根津美術館講堂 定員各回130名
- 担当芸員が展覧会の見どころをスライドを用いて解説いたします。
内容は、2回とも同じです。事前申し込み不要。開始の15分前に開場。
※いずれのレクチャーも、先着順で定員になり次第締め切らせていただきます。参加は無料ですが、入館料をお支払いください。
- 特別催事**
(事前申込制) 「『江戸の茶の湯』展 記念茶会」
今回展を記念して、以下の日程で、川上不自ゆかりの茶人の皆様によるお茶会を開催いたします。
- ・11月20日(水) 岡田 宗正氏
 - ・11月23日(土・祝) 川上 宗雪氏
 - ・11月30日(土) 川上 不自氏
 - ・12月4日(水) 川上 宗順氏
 - ・12月11日(水) 小川 宗洋氏
- ※場所はいずれも、当館庭園内茶室。
後日詳細が決まり次第、当館ウェブサイト、催事チラシにてお知らせします。

開催概要

- かわかみふはく
展覧会名 特別展 江戸の茶の湯—川上不自 生誕三百年—
- 主催 根津美術館
開催期間 2019年11月16日(土)～12月23日(月)
開館時間 午前10時～午後5時(入館は閉館30分前まで)
休館日 毎週月曜日(ただし12/23は開館)
入館料 一般 1300円(1100円)
学生 1000円(800円)
※()内は20名以上の団体料金、障害者手帳提示者及び同伴者1名の料金。中学生以下は無料。
- 前売券 一般 1100円 学生 800円
※2019年9月7日(土)～11月4日(月・祝)
企画展「美しいのち」開催期間中、
当館ミュージアムショップにて販売
- アクセス 地下鉄銀座線・半蔵門線・千代田線(表参道)駅下車
A5出口(階段)より徒歩8分、B4出口(階段とエスカレーター)より徒歩10分、B3出口(エレベータまたはエスカレーター)より徒歩10分
- 住所 〒107-0062 東京都港区南青山 6-5-1
お問合せ Tel. 03-3400-2536 (代表)
website <http://www.nezu-muse.or.jp>
- 記者内覧会のご案内 2019年11月15日(金) 午後1時30分～3時(予定)
ご案内ご希望の方は、当館広報課へご連絡ください。

秋の庭園

美術鑑賞のあとは、根津家私邸時代の面影を残す17,000㎡の日本庭園で散策をお楽しみください。
例年11月末頃から紅葉が見ごろを迎えます。
※庭園入場には美術館入館料が必要です。



ひばいし
庭園内の飛梅祠

三館合同キャンペーン 「秋の三館 美をめぐる2019」

今秋も三井記念美術館、五島美術館、根津美術館では、以下の展覧会を対象に、三館合同キャンペーンを行います。

- | | | | |
|---------|---------------------------|-----|---|
| 三井記念美術館 | 2019年 9月14日(土)～12月1日(日) | 特別展 | 茶の湯の名碗「高麗茶碗」 |
| 五島美術館 | 2019年 10月26日(土)～12月8日(日) | 特別展 | 美意識のトランジション <過渡期>
—十六から十七世紀にかけての東アジアの書画工芸— |
| 根津美術館 | 2019年 11月16日(土)～12月23日(月) | 特別展 | 江戸の茶の湯—川上不自 生誕三百年— |

※上記展覧会の観覧済み入館券を、他2館の上記展覧会入館時にご提示いただくと、入館料が100円引きになります。
また、上記展覧会すべての観覧済み入館券のご提示で、3館いずれか1館の次回展に無料でご入館いただけます。

次回展

企画展「^{ついで}対」で見る絵画」 2020年1月9日(木)～2月11日(火・祝)

2幅対・3幅対の掛物や1双の屏風を題材に、図様の連続性や組み合わせの意味を考え、作者や注文主などの狙いを想像していただきます。
同時開催展では新春恒例の「百椿図」も。

きょうけいず
菓鶏図(部分) 狩野山雪筆
日本・江戸時代 17世紀
根津美術館蔵



同時開催：
展示室5「百椿図
—子どもにちなんで—」
展示室6「初月の茶会」